

開発の現場から

正念場の東ティモール

鈴木俊康

東ティモール事務所員

独立行政法人 国際協力機構

2002年にインドネシアから独立した21世紀に初めて誕生した国。この程度のことは本ジャーナルをご覧の方々にご存じだとは思いますが、ニュース等で東ティモールについての状況を耳にする機会も減り、最近の状況等を把握している方は少ないと感じるので、東ティモール自体を改めて紹介したい。

冒頭に記載のあるとおり、2002年にインドネシアから独立を果たし、以後国連（2002年からUNMISSET、2006年以降はUNMIT）による行政支援を受けていた。2006年に騒乱が起き、一時混乱があったものの、その他はとりわけ大きな混乱はなく、2012年に国連が撤退し、2013年からは東ティモール政府主導による国家運営が開始され現在に至る。現在は治安も安定しており、2016年11月には全国において村長選が実施され、混乱もなく無事終了した。2017年には大統領選及び議会選挙が控えており、こちらについても成功裏に実施されることが期待される。



東ティモールに出店した
ビアードパパ

経済状況についても、2010年から2015年のGDP成長率を見ると、平均6.29%¹を記録しており、これは発展著しい他の東南アジア諸国と比較しても遜色はない。東ティモール政府としても、2010年に発表したTimor-Leste's Strategic Development Plan 2011-2030 Summaryの中で、“from conflict to prosperity”をスローガンとして掲げており、この数字はそれが順調に進んでいるような印象を与える。また、徐々にではあるが日系企業の進出が進んでおり永

谷園グループの麦の穂がビアードパパのフランチャイズ展開を開始したり、ヤマハが特約店を通じた販売を開始したりしている。

恐らく多くの方が紛争のイメージを払拭できていないのではと感じるものの、実際はこのように着実に開発の歩みを進めている。

また、ここに暮らす東ティモールの人々は本当に幸せそうに生活しているように見える。独立を勝ち取り生命の危機に脅かされることもなくなり、豊かな自然に囲まれ、家族と共に暮らしている。東ティモールに対して私が抱いた第一印象はこうしたものであった。特に、1999年の住民投票後にインドネシア軍に殺される恐れがあったので

¹ World Bank Open Data より筆者が計算。

山に隠れていた、インドネシアに逃げた等の生の話を東ティモール人の同僚からから聞いたのは非常に印象的で、彼らが現在如何に平和の恩賞を享受しているかは想像に容易い。

余談ではあるが、途上国には珍しくない物乞いやストリート・チルドレンに東ティモールで遭遇したことはなく、ホームレスは首都ディリ市内で2人のみ確認しているが、それ以外は見ることがない。2人と識別できる時点で他国との違いは明らかで、この国の不思議なセーフティー・ネットが働いている証拠だと感じた。

このように見ると、独立後、東ティモールの開発は順調に進んでおり、明るい未来が待っているようにしか見えない。しかし、彼らのこの順風満帆に見える状況は非常に脆弱なものの上に成り立っている。

現在の政府の歳入の内訳を見ると、例年9割近くを石油収入に依存している。2015年を例に挙げると、当初予算がUS\$1,500百万（借款を除く）²だったのに対し、石油収入を持続的かつ有効的に活用していくための石油基金を東ティモール政府は有しているが、この石油基金からUS\$1,278百万³が予算として支出されている。その一方、石油が2020年には枯渇すると言われていただけでなく、石油基金も2024年にはなくなると試算されている⁴。

この石油基金が底をついてしまったら、恐らく現在の安定した状況を保つことは極めて困難だろう。

こうした状況下、非石油産業の開発が東ティモール政府の目下の課題であり、産業の多様化に取り組んでいる。JICAとしても産業の多様化に資するインフラ開発、人材育成、農業等への支援を行っているものの課題は山積みだ。

私が担当している農業、特にJICAが支援を行っているコメに関して言えば、生産性の向上（灌漑施設の維持管理や営農技術の改善）だけではなく、農民の生産意欲の向上も課題となっている。生産意欲の向上と聞いてもあまりピンとこないかもしれないが、東ティモールにおいて国産米のマーケットが発達しておらず、生産性の向上が販売量の増加、すなわち収入の向上、ひいては生活の改善に直接的に結びつかないため、そもそも生産性を向上させようという意欲すら湧きにくい状況になってしまっている⁵。こうした問題の他、安価な輸入米との競争やマーケットの発達を阻害している交通イ

² State Budget 2015 Budget Overview Book 1, Ministry of Finance of RDTL

³ Petroleum Fund Annual Report Fiscal Year 2015, Ministry of Finance of RDTL

⁴ <https://www.laohamutuk.org/econ/model/13PFSustainability.htm>

⁵ こうした状況を改善すべく、JICAだけではなくUSAIDやオーストラリアも農家のマーケットへのアクセスを改善するため、生産性だけではなくバリューチェーンを強化する支援を行っている。

ンフラ等の問題もある。

このように各分野において様々な課題が山積しており、加えて簡単には解決できない課題ばかりであるが、決して明るい材料がないわけではない。

例えば、非石油以外の主要輸出物であるコーヒーに関して言えば、東ティモール産コーヒー＝フェアトレード・コーヒーと認識されがちだが、東ティモール産コーヒーでスペシャルティ・コーヒーの認証を受けているものも少なくなく、品質的にも世界で戦える。先日東ティモールで開催されたコーヒー・フェスティバルにおいて、日本の NGO であるピースウィンズ・ジャパンが現地にて生産支援を行っているエルメラ県レテフォホ郡産コーヒーがコンペティションで 1 位を獲得したので、日本在住の皆さんも是非ご賞味頂きたい。

観光に関しても、私は東ティモールに赴任してから、週末の息抜きとしてスキューバダイビングを始めたのだが、様々な国からダイビング目当てで訪れている人々に遭遇する。彼らは口をそろえて、“untouched nature”、“amazing dive spot”、“most beautiful ever”などと手放しで東ティモールの海を絶賛している。



手つかずの海と自然が
残るティモールの風景

このように、非常に小さな島国であるが世界に誇れる魅力がすでに存在しているのだ。恐らく、このような魅力を活かすも殺すも、東ティモール政府のここ数年の頑張り次第ではないかと感じている。その理由は、上述した石油基金の状況からである。本当に石油基金が枯渇してしまったら、この国の政治、経済、あらゆるシステムが立ち行かなくなってしまう。まさに今が正念場だ。

この正念場の時期にこの地に赴任したのも何かの運命だと私は感じている。東ティモールには学生時代に訪れた経験があったものの、自分が仕事で来ることになるとは全く想像していなかった。加えて、今は東ティモール政府に寄り添い、ともにこの正念場を乗り切っていかなければいけない立場にある。若くて未熟な部分が多い国であるが、この国の明るい未来のために役に立てることを願う。また、安定しているからこそ日本のニュース等で見聞きする機会が減ったのだと思うが、多くの方々に復興期を抜け出した東ティモールを、これまでの視点から抜け出し違う視点から注目して頂きたいと思う。